

---

# 幻想郷フハフハン録

アイン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻想郷フハフハン録

### 【Nコード】

N4447Y

### 【作者名】

アイン

### 【あらすじ】

東方のフハフハンとした話を書きます。

## すいかドロップ（前書き）

この作品は東方Projectの二次創作作品です。オリ主はいませんがオリキャラはちよくちよく出ます。世界観は一緒ですが、それぞれは短編で明確な主人公は存在しません。

## すいかドロップ

萃めて萃めて萃めて 疎<sup>はな</sup>す

青天の頃、淡い木漏れ日、絶好の散策日和。  
そして二本角のかわいい私。

今日はどこに行こうか。

巫女は昨日おちよくった、白黒も右に同じ。  
隙間の狸は胡散臭い、冥界は遠い。  
総じて行く気が起きない。  
ぶつちやけてしまうならメンドクサイ。

このまま酒でもかつくらっているかと思っていたところで、  
里の中で妙な物を見つけた。

その少女はそれを嬉しそうに片手で持ち、  
太陽に掲げて反射を楽しんでいた。

ありや鉱石じゃないか。

地下でも見たことはあるがあんなに綺麗な形の物は初めて見た。  
綺麗な楕円系の緑色の宝石、ああゆうのを玉というのだろう。  
あれ一つ売るだけで一財産稼げるんじゃないだろうか。

何でそんなものをあんな年端もいらない少女が持っているのだろう。  
家から持ち出してきたしまったのだろうか。

人間の女は光物が好きだというのがまさかあんな小さな少女の頃から  
そうだとは・・・

私は目の前の少女の末恐ろしさに戦慄していた。

まあ自分ももし酒代に金かかるのならと考えると恐ろしくて堪らないのは置いておく。

少女は石に顔を近付けるとおもむろに

「ちょおおおおおおおい！！！」

危なかった、体を実体に戻し鉱石を口に入れそうになる手を掴んで止めた。

少女にとっては突然私が現れたように見えただろう。  
ビクツと体を震わせこっちを見ていた。

「お譲ちゃん、こんなもの食べちゃいけないよ」

手を離し、目尻に微かに滲んでいた少女の涙を拭う。  
未だ何を言われているのか分かっていないのだろう、少女は首をかしげながら頭にいくつもの疑問符を浮かべていた。  
私は嘆息しながらもう一度忠告することにした。

「お譲ちゃん、鉱石は食べ物じゃない」

依然黙ったままの少女、これは鉱石の説明からしなければいけないのか？

段々面倒くさくなって来た私に少女は口を開いた。

「これ、ド、ロップ」

あまり喋るのが得意ではないのだろう、結構人見知りする子どもだ

と見た。

そしてドロップ？ドロップとはなんぞや？  
今までに聞いたことのない単語。

「ドロップ？」

思わず口にしてしまった私に、コクコクと頷くと少女はその石を私に差し出してきた。

思わず受け取ってしまう、手のひらに乗ったそれはキラキラと輝いていて

「甘い？」

微かに甘い匂いが鼻をついた餡子や団子のような匂いではない。  
もつと爽やかな・・・

「なんかメロンみたいな匂いだね？」

そう果物のような香りである。

少女はまた頷くとカラカラと金属のぶつかる音をさせながら小さな缶を取り出した。

その缶を見せてくる少女、なんか可愛い。

「メロ、ン、あじ。」

缶を受け取ると教えてくれた。

その缶には上に封がされていて、振るとカラカラと音がする。

「メロン味い？」

訝しみ缶を観察してみる。

”サ○マドロップス” その缶は大きな文字でそう書かれてあった。恐らくはこの商品の名前なのであろう。

よく見るとそこにメロンだのリンゴだのパイナップルだの書かれている。

外来の珍しいモノがこんなところでお目にかかれるとは。しかしなんだメロン味って。

これがメロンでないことは誰がどう見ても明らかである。ならば……

今度は私が首を傾げる番だった。

すると少女がそれを察したのか、缶を貸してという風に両手をこちらに差し出してきた

いちいち動作が可愛いなあ、こんちくせう。

「ああ、ごめんね、ほら返すよ。」

缶を渡すと私に見えるようにして缶の封を開ける。

中から手にあるのと同じような物をだした。

あれもドロップなのだろうか？

「パ、インあ、じ。」

そう私に言うとき少女はそれを口に入れた。

今度は制止する暇もなかった。

体に変化はなさそうである。

というか顔が緩んで嬉しそうである。

「お、いしい。」

みると口の中で転がしている様子  
そりゃそうだ、あれを丸呑みしていたら喉が詰まって当たり前だもの  
納得納得。

「私の勘違いだったみたいだね。」

いつまでも持っていては少女が食べられない。  
この緑色も返そうとすると手で遮られた。

「たべて」

お前も食べてみるということらしい。

「いいのかい、お譲ちゃんのドロップが一個減っちゃうよ?」

コクリと頷く少女、思わずいいいいこしてしまいそうになる。  
もう一度手の上にあるドロップを見る。

「じゃあ」

その瞬間私の脳裏にある思いが駆け抜けた。

相手から渡され相手は他のを食べて毒が入っていないことをみせる。

私にも食べてみると言うてくる

何も考えず食べる私 今ここ



なんか前にもあったなあこんなの・・・  
前の時の事を踏襲してない辺り実に私達らしいと思う。

「お、うまい」

まあ心配するまでもないとは思っていたけど口の中にはきちんとメロン味が広がった。

私の感想に顔を綻ばせる少女。

少し体を弾ませながら機嫌良さそうに缶をカラカラ鳴らしている。

「ありがとう、お譲ちゃん。」

少女の頭をなでる。

「さ、やか」

地面に漢字を書いて自分を指さす。“彩香”  
へえ、漢字を書けるのか  
そついや半妖のが寺子屋を開いていたっけ、クソ真面目と聞いたから会ったことはあまりないけど・・・

「彩香か、私は伊吹萃香だ、伊吹萃香」

私も地面に字を書く。

多分・・・これであっていたと思う。

「一字お揃いだな。」

目線をあわせようとしくともあっているのが悔しいやら悲しいや

ら。

「よし、彩香お礼をしよう。なんでもいいよ、いつてみな。」

別に特に理由はない。

もらったものは返そうという話し。

こんな小さい子にとってこの缶の一粒一粒は私が勘違いしたように本当に鉱石の一粒一粒のようなものなのだろうから。  
これはほんのお礼。

「・・・なんでも、い、いの?」

おずおずと言ってくる

「ああ、鬼は嘘をつかない。」

「・・・お、に?」

そういえば、私が何者なのかを教えるのを忘れていたか。  
まあ、突然現れた時点でまともな奴とは思われていなかっただろう。

「そう、私は人を喰う恐い化物さ。」

試すように言う、何と返ってくるか興味はあった。

「すこ、し、こ、こわい。」

体を見ると少し震えている。

「いい娘だね、正直ものは好きさ。」

ならば、それを知った上で彼女は何を願うのだろう。  
私に消えてくれと願うのだろうか。  
それとも・・・

「ともだちになつて」

そこだけは、その言葉だけは一切の澱みなく発せられた。

目の前の化物に友達になれと言ったのか？  
恐いと言いながら、体を震わせながら。

「お譲ちゃん、私は鬼だ。人を攫うし、喰いもする。やろうと思えば人里だつて襲える。あんたの小さな体なんか一握りで潰せる。そんな化物と、あんたは友達になろうつてのかい？」

自分で口調が変わったことを自覚した。

素直にドロップが欲しいと言えばよかったのだ。

それなら私は喜んで萃めただろうに、変なことを言うから私のなにかに触れることになる。

鬼とは畏れられるものである。

私は鬼であることを誇りに思っている。  
人が大好きだった。

そんな私達を騙したのは誰だ？  
他ならぬ人じゃないか、ならば・・・

「ともだちになつて。」

・・・

「なんだって？」

「とも、だ、ちにな、りた、い。」

奇跡も此処で終了なのだろう、元の舌つ足らずに戻った。

まったく、大事な所を抜くなどというのだ、そこを伝えるべきではないのか。

なんか今までであった自分の中のかなにかが白けていくのを感じる。

呆れて声もでねえ。

なんであつたばかりの私にそんなことが言えるんだよ？

「わた、し、と、もだ、ち、いない、か、ら。」

ん？

「わ、たし、うま、くしゃ、べ、れない、から。」

ああ、そのせいで虐められたんだろうな、子どもはその辺敏感なものなあ。

「あんなに、しゃべつ、て、もらった、の、はじ、めてだ、から。」

途切れ途切れながらも喋る。

なんか、泣きそうになってないか？

「ともだちに、なつて、くだ、さい。」

遂に決壊する涙腺。

あゝあ、泣いた泣いた、っていつか泣かせた泣かせた。  
何をやっているんだ私は。

恩返ししようといったのは私なのに泣かせてからに、実にけしからん。

「あああ！泣くなお譲ちゃん。」

慌ててあやそうとする私。

人里の中なので誰が見てるか分かったもんじゃないのに・・・

考える。呆れながらも、恐怖を抑えて、私に立ち向かった少女を考える。

元来、鬼退治つてものは力比べに勝って成り立つもんだが、勇気を持ち己の力で認めさせる。

なんやかんや言ったがいいだろう、というか根本の自分が認めちゃってるし。

なにより、そうなりたいと思ってしまった私もいる。

化物を恐れるのは仕方ないが、少しずつ慣らしてやろう。

まあ、本当に危ないような所は避けるとして、勇儀なんぞはああみえて結構面倒見いいし、面白いことになりそうだ。

この小さな友達を連れて何処に行こうか。

まあ、何処でも行けるさ、時間はある。

いろいろな場所に行こう

いろいろな人と出会い、いろいろな事を学ぼう。

とても素敵な話をしよう。

とりあえず

「こちらこそ、友達になってください。」

まずはその第一歩。

## すいかドロップ（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

感想、ご指摘ありましたら今後の肥やしにしますので、是非お願いいたします。

瀟洒ですが何か？（前書き）

今回は咲夜さんですが、そのまま紅魔館に移行したりはしません。



瀟洒ですが何か？

Time waits for none

「これはどういことですかお嬢様？」

ここは紅魔館

悪魔が棲む真つ紅な館

その応接間に私のご主人様がいます。

「待ちなさい咲夜、お願いだからそのナイフを降ろして、いや、マジでお願いします。」

もはや土下座しそうな勢いのお嬢様。

応接間は惨状となっている。

窓ガラスは砕け、テーブルは割れ、カップもほとんど割れている。

お嬢様、あの絵はフェルオールですよ？

私がどれだけ紅魔館の出費について頭を悩ませているか知ってもらいたい光景である。

「〜でね、それで霊夢が」

ずっと説明を続けているお嬢様。

「そうですか、つまり悪いのはお嬢様なのですね？」

「咲夜！？人の話を聞いていたの！！？」

愕然とした顔で突っ込むお嬢様、正直お嬢様の弁解なんて一切耳に

入っていない私。

いっぺん死んだったらええねん、いや、死なないか。

「とにかく、足りなくなっただものを発注してきますので外出しますよ？今日のティータイムはお預けです。」

「そんな！？」

「自業自得です、今日ぐらい我慢してください。」

「だから私じゃなくて霊夢が」「いってきますね。」「」

「・・・はい。」

渋々といった感じで席に座り直すお嬢様、だからいっぺん死んだったらええねん。

応接間を出て廊下を歩く。

何人かの妖精メイドと擦れ違いながら溜め息をついた。

彼らに目配せしておくのを忘れない。

吐く息が白い。

外を見てもうすっかり冬である。

はあ、寒い寒い。

いつものメイド服にマフラーをまいて私は外に出た。

「およ？咲夜さん、今日もお出かけですか？」

我が家のポンコツ門番、紅美鈴、珍しく今日は起きている。

「そうよ、お嬢様が応接間の備品グシャグシャにしちゃったの、今からその補充に行ってくるわ。」

擦れ違うが目線を交わすことはない。

「そうですか、それは難儀な。」

アハハと笑う美鈴、暢気に門に体重を預けている。

「大丈夫だとは思うけど、留守は頼んだわよ?」

早く帰って来ないとまた紅白だの白黒だのがまた襲撃に来る可能性がある。

「はい、精一杯大地からエネルギーを吸収しておきます。」

こやつ寝る気満々じゃないか、ああもうどいつもこいつも・・・  
私は買い物への道を急いだ。

「というわけで、ヘキスト製のティーセット二組をいただきたいのですが。」

「あいよ」

霧雨商店は、人里の中でも一番の規模を誇る商家である。

一番品揃えが良く、また、一番愛用しているため値段交渉もしやすい。

「それと、応接間に飾る絵画が欲しいのですが。」

「そうですね、絵画となると数が少ないですが、たしか」

店主は顎に蓄えた髭をガシガシ掻くと奥に引っ込んでいった。

「○ヤガール、○ネ、ダ○、有名所はこの辺りでしょうな。」

そうやって並ぶ絵画、店主、重要文化財を何処から手に入れてきたのですか？

「分かりました、この際です。全て紅魔館まで運んでおいってください。」

屋敷に関することで一切手は抜きません、それは最低限必要な経費であり節約などの思考が介在する余地はありません。

「畏まりました、今後ともご<sup>ひいき</sup>贖<sup>い</sup>に。」

一度頭を下げまた引つ込んでいく店主。  
これでとりあえずは終わり。

「お邪魔しました。」

誰も居なくなつた店内に挨拶を済ませ、店を出た。

人里を歩く。

まあ、何を買うでもない。

ただでさえ経理が危ないのだ、気軽に何かを買うつもりはない。

ハア

それにしても寒い、天気はいいくせに太陽は少し暖かい位。  
もう少し頑張れ太陽。

「泣くなお嬢ちゃん！」

何処からか声が聞こえた。

確か神社の宴会で騒いでいた鬼の声ではなかったか。

また、何か仕出かしたのか

巻き込まれたくない、その一心で私は声のする路地を一瞥するだけに留めた。

そこにいたのは小さい子供を泣かして焦っている鬼。特に問題はなさそうだが、何をやっているんだか。

再び大通りを歩くが、いくつかの店舗が目に入る。

甘味処、問屋、雑貨店

・・・問屋

「あ~~~~あ。」

どうしようか、半袖だったしなあ、まあそんなの全然気にしてなかったけどなあ。

大地からもエネルギーを吸収してるらしいし。

「すみません。」

そっついながらも、私の足は問屋に向いていた。

「いらつしゃい。」

出てきたのは痩せぎすの男。

「捜して欲しい服があるのですが。」

帰り道。

寒い、さむい。

何かもつと手軽な移動手段がないものだろうか。

ハア

吐息で自分の手を暖める。

今度河童に作ってもらおうか。

なんせ盟友なのだし、なんか私の事をあまり人間として見ていないような気がするのは別として・・・

「真枇<sup>まび</sup>!!!」

霧の湖に差し掛かった所で、何処からか悲鳴が聞こえた。  
見ると百足のような妖怪に襲われる二人。

一人は氷精、もう一人は人間の少年。

ハア、面倒くさい、巫女はどうしたのだ、巫女は。

あの出廻らしばかり飲む貧乏紅白め。

氷精だけなら助けはしないのだが、また要らぬ出費だ。

私はナイフを一本だけ投擲した。

ナイフは百足の体に刺さり、苦しそうに身をくねらせていた。  
二人の逃げ出す時間は作れただろう。

無理だとしても致命傷だ、追うことはできない。

私は目を離し、紅魔館への道のりを進んだ。  
霧の湖を抜けて紅魔館へと至る。

「やあ、咲夜さん、お帰りなさい。お望みのお買い物はできましたか？」

「・・・一つできなかったわね。」

「そうですか、紙袋を持っている所を見ると、私的な買い物で？」  
「・・・そうね。」

美鈴を見る。

別に寒そうにはしていない。

体を包むは一張羅のチャイナ服。

刻まれたスリットは、健康的な脚をこれでもかと思せつけるくらいに深い。

足は靴のみを履き、頭部にあるのは“龍”の字のついた帽子だけ。

見ていて寒い。

「最近、寒くなって来たわね。」

「そうですね。」

他人事のように言うこの女。

「あなた、服はどうしたの？」

「里の子にあげちゃいまして・・・」

アハハと笑う、それで自分の服がなくなってどうするんだ。  
こんなに寒いのにぼろぼろの服で遊んでいるんですかと？

今はお前が半袖で立っているじゃないか。  
やっぱり、寒かったんじゃないか。

馬鹿じゃなかるうか。

「今度から、もしそういう子を見つけたら私に相談しなさい。」

ガサゴソと紙袋を漁る。

「ほら、これでも着けてなさい。」

渡したのは甲の部分に星のついた手袋と半纏。

「おおう、いいんですか!？」

「見てるこつちが寒いだけよ。」

目を輝かせている。

「後でまた、薬湯でも持ってくるわ。」

門を通り過ぎ玄関に向かう。

「ありがとうございます。」

「気にしないでいいわ。」

後ろから聞こえてくる声に答える。

紙袋にはまだ荷物が入っている。

それを置いて向かわなくては。

季節が間に合うだろうか、いや、間に合わせてみせる。



問屋に探していた服はなかったけど。

なければ作ればいい。

今度は子供にあげてしまわないように釘を差さなくては。

私に対処すればいいのだ、うまくいったら紅魔館も働手が増えるかもしれない。

袋の中の毛玉だろうが、布だろうが、私の手にかかれば冬服になるのだ。

なにせ私は瀟洒なメイド。

だから当然

「お嬢様、ティータイムの時間ですよ」

こちらの準備も完璧である。

瀟洒ですが何か？（後書き）

読了ありがとうございました。

## 虎 鵜

種は時いた、それを肥え太らせるのはあなた達だ。

今回のこの出来事は私にとって不愉快極まりない。

私にとっては正にアイデンティティであつたし、らしくないと自分でも自覚している。

正体不明の私が自分自身を否定する羽目になるとは。

夜が来る、今日も永い夜が来る。

木っ葉はざわめき、鳥は啼き、丸い月が出張ってくれば、外はもう夜である。

影は伸び、人は暗闇の中で、心細い灯りを燈す。とも

脚色を架けよう、一つの物を複数に、そこに恐怖が産まれる。何も危険がないモノを人は恐怖で避ける。

闇夜は修羅の巷

薄暮の彼方に至るまで、そのお時間は私達のものである。

それでだ、如何にも私の体は、人に言わせるのなら不定形であるらしい。

時には虎に見え、その癖、鵜うみの様に啼くという。

誰が付けたのかは知らないが、正鵠を射てはいまい。

なにせこの体は悲しい程にその証言と違っている。

そんなだから、いつしか正体不明と言われ人々に恐れられた。

知られないことが少なからず私のアイデンティティだった。

なんせ知らないものを人は恐がるから、その本質を見極めようとしないうで、あなた達が逃げて行くから驚かすんじゃないか。

場面なんて何も変わらない一つの森の夜の話。

女は森を駆けていた、何がしたいかは分からないが、夜露で湿った土の上を必死に腕を振るって駆けていく。

私の出番じゃないだろうか、妙な確信がある。

少女は怯えている、それが垂れ下がる木の枝にか、長く伸びた自分の影にかは別として、何かに酷く怯えていた。

最近私を嗅ぎ回る女がいて、煩わしいっらない。

おまけにそいつは啼き声を恐れない、小さなお供だけ連れて危険渦巻く夜の世界に足を踏み出すのである。

危なっかしい事この上ないその様は、私でさえ一時頭を抱えたくらいだ。

今はそんなことを考える時ではない。

既に種は蒔かれているが、偶には私が肥えさせるのも吝かちかでわない。ただ啼く、それだけでいいのだ。

○○○○○○。。。。！！！！

それは足を止め、真っ青な顔で辺りを見渡した。

何と聞こえているかは分からない。

しかし、私の鳴き声は確実に彼女を恐怖に陥れていた。

○○○○○○○○。。。。！！！！

小刻みに震えている女。

夜が怖いことは分かっていたはずなのに。

何で夜外にでた？

悲しいかなこの世界は無力な人に優しくないぞ。

最近夜に出歩く人間も減ったというのに。

まあ、私のせいでもあるのだが・・・

さつさと逃げ出せ、私の声に恐れを成して。

里人は家へお帰り。

腰が砕けたのか、すぐにはそこから動くことができない様子。

まあ、精々恐がらせておく、それで二度と来ることはないだろう。  
さあ恐れる。

私は彼女の前に姿を見せた。

「・・・お父さん。」

.....

今、何と言った？

女に近づく、不様にも少しずつ後ろに下がる。

○○○○○○。。。。！！！！

「やめてえ、お願い、許して、もう、やだあ。」

絞り出すようなその声

私はその者の一番怖いモノに見える様である。  
ならば、この女が一番怖いモノは・・・

「自分の父、だと？」

私は女の耳に入らないように呟く。

私を父と見た女は頭を抱え丸まっていた。  
まるで何かから身を守るように。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

何度も小声で謝る、何だ、この女はそんなに悪い事でもしたのか。  
こんなことは初めてだ。

苛立つ。

私が求めていた恐怖はそれじゃない。

もっと未知のモノだ、私は正体不明なのだ。

もっと訳が分からないもので、何が恐いのか明確であってはならない。

「やめた。」

私は能力を解いた。

こんなのは違う、不愉快だ。

人は見知らぬモノを恐れればいいのであって、何か分かるものを最も恐いモノにすべきではない。

在り方が間違っている。  
私が揺さぶられている。

女は突然姿を消した父親と、突然姿を現した私に驚いていることだろう。

喜べ、私の姿を本当の姿をちゃんと見たのはお前が初めてだよ。  
そんなことはどうでもいい。

「不愉快だ、女、それは不粹すぎる。」  
「へっ？」

昏い闇の中、月明かりだけを頼りにして女を見る。  
何だ？

顔には痣ができ、腕も擦り傷だらけじゃないか。  
見えている部分だけでそうなのだから、見えない所はもっとあるの  
だろう。

「私は正体不明なんだ、決してお前の親父殿ではない。」

それだけで力が抜ける少女。  
何だ、人型だからと私を侮ったのか？  
父は私より恐かったか？

私は目に見えて父より怖いぞ、なんせ人を喰うからな。  
だから、攻め手を変える。

「親父殿は手を挙げるのか？」  
「・・・はい。」  
「恐いのか？」  
「・・・・・・はい。」

それだけ聞ければ十分

「さっさと里に帰れ。」

私は背を向ける

「そんなっ!!」

「父が殴るよりもこの森は怖い、どれだけ苦しかろうと、人ならば生きていけ。」

短い人生だからこそ、安易に死を選ばない。

里の人間からはそんな印象を受けた。

愚直で真っ直ぐでつまらない。

そんな印象を人から受けた。

「すみません・・・」

後ろから申し訳なさそうな声が掛けられる。

本当にいい度胸だ。

「なんだ？」

これを最後にしよう、そう考えて私は背中越しに声をかけた。

「里って・・・どこら辺ですかね？」

・・・フム、嘘ではなさそうである。

「外人か、お前は。」



どうも外の人間であるらしい。

そう考えるなら、確かに納得する。

不思議な格好は外の格好だったのか。

「ハア、里からしたら確かに私は外の者ですね。」

段々慣れてきたのか口調が変わる。

「というか本来がこれなんだろう。」

「なら、家に帰るのは諦めろ。」

「本当ですか!？」

途端に明るくなる女、ここは絶望する所だ。

「それは願ったり叶ったりといえますか。」

溜め息をつく。

「もういい、里はあっちだ。」

指差した先に、人里がある。

もうじき夜が明ける、今ならば、取って喰われることもなかろう。

「ありがとうございます。」

体を起こして、指差した先を見る。

「真っ直ぐ、歩いて行け。」

おれなどいない、さっさと消える。

背を向けていると歩き出す音がする。  
少しづつ足音が遠くなる。

「ああ、そうだ。」

いい事を思いついた。

いつも私がメンドクさいと頭を悩ませているのだ。

これはチャンスじゃないか。

精々困らせてやる。

そんで困って、また私を困らせに来い。

「人里に降りたら稗田という家を訪ねろ、又エ様からの紹介だ。」

これは私からの挑戦状だ。

## 東方忘却録（前書き）

これだけ毛色が違いますが、最後にはフハフハンとしますので。  
一応、これは続編という形になります。

## 東方忘却録

捻じれに捻れた捻じれを 綻ほどく

満月は程遠く、月の頃は皿ではない。

「雨か・・・」

呟く声のよりもっと前から雨は降っていた。  
その呟きを掻き消すように五月蠅い音で。

滝のような雨だ、最近の言葉で言うならバケツを引つ繰り返したような雨である。

蠟燭一本で照らす私の部屋は何やらおどろおどろしい。  
書物にあたって文献を調べる。

今日は雨が酷くなりそうだったので、早めに子供達を帰して置いたのだが、正解だったようである。

明日は算術をする予定なのだが、この雨では明日出来るか如何か。  
おそらくはできないだろう。

それでも、準備をしない訳にはいかない。

これだけ雨が降ってしまうと里の人は大丈夫だろうか、畑などは大変かもしれない。

これほどの量の水では逆に土から栄養が逃げ出してしまうだろう。

満月の仕事を終えた私としては今はあまり気がかりもないのだが、

心配ではある。

私はポケットから今日生徒からもらったものを取り出した。自前の包み紙に包んで保存してあるそれは、ドロップというらしい。砂糖を固めたもので、それを舌で転がして楽しむのだそう。

人見知りの強い子だったが、最近友達が出来たと嬉しそうにしている。

それについては少し安心したのだが、その相手が、のんべえの鬼、あの伊吹萃香と聞いて少し気が遠くなった。

頼むから授業中に酒を飲みだしてくれるなよ。

鬼とは少し会話の席を設けなければいけないのかもしれない。

他にも生徒の男児が百足の妖怪に襲われたらしいし（まあ信じられない話だが、氷精が助けたらしい。）、何だかんだと問題が多い。そう、授業と言ったら、最近、稗田家に新しい女中が入ったようだ。

挨拶がてらに、稗田家の主人と一緒に顔を見せに来た時に話を聞いてみたら、外の人間の様で、ダイガクセイだと話していた。

私の参考書を見て懐かしいと呟いていた。

それは里の成人した一般男性にも教えていない（というか必要ない）ものだった。これは驚いた。

一度特別講師として招いてみるのもいいかもしれない。

なにせ、私の授業はつまらないしな・・・

そこらへんは私も勉強させてもらえるかもしれん。

理解はしているが何分性分なのだ、遊びを入れられない自分が偶に煩わしくなるが、そこはどうしようもない、三つ子の魂百までというが私はもつと長い事になる。

・・・普段子供に囲まれているからだろうか  
夜なんかは人が恋しくなる時もある。

どうしようか、もう授業の準備は終わった。

夜が来る、長い夜が。

今日は誰もいないのである。

話し相手が欲しくもあるが、いないのならば仕方ない。

願わくば何もありませんように。

少し早いが私は床についた。

外は雨が降っている、全てを拒むような爆弾のような雨。

## サイキョーのあたい（前書き）

自分の戦闘描写の下手さに脱帽、チルノちゃんは書くの難しかったです（汗）

## サイキョーのあたい

「やめようよ、山にはこわいのがでるんだって」

「こわいのってなにさ」

「たしか、ぬ」「おーい、お前ら授業中に何しゃべってるんだ!」

「

妖精が惑うのは誰の仕業？

「・・・ル・・・ん・・・!!」

私を呼ぶ声がする。

大きく響いたその声は他の何かの耳にも入っているかもしれない。

急がなくては、余計なものがきてしまうかもしれない。

大体、毎回毎回大声で呼ぶなど言っているのに・・・

「・・・ルノ・・・ちゃ・・・!!」

まったく、おちおち、ガマとにらめっこもしてられない。

まあ私が負けるわけないけどね。

「チルノちゃん!!!!」

分かっているって、もう、真柢<sup>まび</sup>は本当に話を聞かない。

もう目と鼻の先だ。

何もなさそうなのでよかった。



「もう、マビ、うるさいわ」「チルノちゃん」「わかってるわよ!!」

目の前にいるっての。

私の姿を見た時から満面の笑顔になる真柢。

「あそぼ!!」

「わかったわよ。」

どうせ何をしようなんてないのだ。

「今日はなにすんのさ？」

「・・・わかんない。」

だろうさ。

どうすんのさ、私知らないよ。

「大体、朱莉とかはどうしたのさ。」

真柢が仲のいい連中を連れていない、どうしたんだろうか。

「うん、今日はあいつら連れてきちゃ駄目なんだって」

でた、真柢はそういう所がある。

それが何かは知らないが、こいつがこんな事を言い出した時は奇妙なほどにあたる。

「ふうん、マビがそういうんならそうなんだろっね。」

それにしても、そんな状況でここに来ていいんだろうか。  
というか、元々、用がある時じゃないとここには来んってのに。

「じゃあ何処に行くのさ？」

「うーん、じゃあもりなんてどう？」

指差したのは妖怪の森。

「なんでさ？」

「なんとなく。」

親にもきつく言われているはずである。  
山には入るなど、妖怪の山は恐いのだ。  
それでも行くと言っているのだろうか。

「あそこは危ないわよ。」

「チルノちゃんがいるから大丈夫でしょ？」

うわ、そんなキラキラした目で顔であたいを見るな。

・・・まあ山も下の方なら大丈夫だろう。

「わかったわよ、なんせあたいつてばサイキョーなんだから。」

言わなきゃよかったあんなこと・・・

妖怪の山に入ったのはいいものの特にすることもないのか適当に散策していた。

「森に来てなにをするつもりだったのさ」

「ちょっと天狗にあいたかったの」  
「帰るわよ!!」

バ力野郎、この野郎、天狗は山の頂上に居座る連中じゃないか。  
あんな、他の奴らと関わりを持たないような奴ら相手に出来る訳がない。

一羽と戦おうとすると天狗全体で襲いかかってくるような奴らだ。

無理だ、私ならまだしも真枇は人間である。

死んだら取り返しがつかない。

「大丈夫だつて」

何が大丈夫かわからない、ただでさえいまは最近気性の荒い妖怪がいるらしいのだ。

誰かに目をつけられる前に帰っておこう。

「話は聞きました、それで？」

一陣の風が吹いた後、振り返ると鴉がいた。  
あいつ幻想郷最速とか言ってる奴だ。

おそらく逃げられない、本当に来るんじゃないかった。

「答えなさい。」

「別に、ただ見たかっただけだよ。」

こいつ、本当に喧嘩売ってんじゃないだろうか。  
笑顔で何言ってたんだよ。

「マビ、黙りなさい!!」

殺されちまったらどうすんのさ。

とりあえずいつ何があってもいいように戦闘態勢をとる。

まあ何をしようと逃げられない事はわかってるんだけど・・・

「その理由を聞いたかったんだけど?」

まだ話してくれる様である。

ひとまず安心。

「本当に天狗に会いたかったんだ。文々丸新聞いつも読ませてもらってます。」

「あやや、購読者の方でしたか。」

急に態度が変わったなこいつ。

「文々丸なんちゃらってなにさ?」

「私が発行している新聞です。」

ニコニコ笑っているようには見えるが目が笑っていない。  
あたいに難しいことがわかるかつての。

「それならなおさらですね、人里に帰ってください。いまこの山は人が入っていい場所ではありません。」

「なんで?」

「あなたに教える必要はありません。」

そりゃそうだ、まず話しがこんなに成り立っている時点でおかしい。  
相手はこの山の頂点の一羽、どこまでも高圧的な天狗なのである。

話は終わった。

「マビ、行くよ。」

とりあえず引き下がらねば、もうタイムアウトである。

「折角のお客様をお送りしたい所なのですが、私にも用事があります。」

少しシュンとしたようではあるがどうせ演技なのだろう。

「妖精なんかには任せるのは気が進まないですけど、頼みましたよ？」

だから目が笑ってないって、ニツコリ笑ってはいるんだけどなあ。

「まかせなさい、なんたってあたいはサイキョーなんだから!!」

見下してくるのは気に食わないけど、戦って勝てる訳もない。  
私に出来るのは精々強がっておく事だけ。

「なにが最強なんだか……。」

天狗は何か呟いて消えた。

飛んでいく姿すら、私には見えなかった。

「さつさと山を降りるわよ、マビ」

「うん」

さつきが嘘だったかのように素直についてくる。

なにがしたかったのか本当に分からない。  
とりあえず急ごう、日はまだ高いけど、天狗が降りると言ったのだ、  
急ぐに越したことはない。

「……………」

すぐ近くで、重い体を引きずるような音が聞こえた。  
何なんだ、天狗がいなくなった途端に来るなんて。  
おそらく、いなくなるのをまっていたのだろう、枯れ葉も目立つ木  
々の中、赤い慟猛な目がこっちを見ていた。

「……逃げるわよ、マビ。」  
「うん!!」

ダッシュでそこから逃げ出すあたい達、  
空に逃げる事が出来ないのが悔やまれる。  
飛べない真枇を抱えた私ではすぐに撃ち落とされてしまう。  
救いなのは相手の移動速度がそこまで速くない事だが、その差は少  
しづつではあるが詰まってきた。

そこまで登ってもいなかったから森を抜けるのは不可能じゃない、  
でもその先がない。  
おそらくこの差は森を出る頃にはなくなるだろう。

覚悟を決めなければならない。

気付けば。

もう出口は目と鼻の先である。

「マビ、あんたまだ走れる？」  
「う、うん大丈夫。」

限界だ、虚勢を張っているが息も絶え絶え、足取りも重い。  
無理もない、この寒い中、荒れた道なき道を全力で降ってきたのだ、  
五歳のこどもの限界だろう。

「もう少しがんばりな、出口はすぐそこだから、真っ直ぐ走るんだよ！！」

私は走るのを止めて怪物を見据える。

「チルノちゃん！！」

真柢は殺させない、あたいは死んだって替えが利くけど、真柢の体は一つしかない。  
なら、玉碎覚悟で私が

「いいから、行きな！！」  
「やだ！！！！」

真柢は離れなかった。  
くそ、いいから行けよ、あたいじゃあ、あんなの倒せないよ。  
真柢が死んじやうよ。

「お願いだから行つて！！！」  
「やだ！！！」

怪物はもうすぐそこである。  
もう視界には霧の湖も見えている。

自分の憩いの場所は目の前にある。

それでも、腹を括った。

「真枇、後ろの木にでも隠れてな。」

「でも・・・」

「いいから。」

促すと、少し離れた所に立ってこちらを見る真枇。

ホントは遠くに逃げて欲しかったけどまあ仕方がない。

「守るって、言ったもんね。」

あいつを、ここで殺す。

方法はそれしかない、力もない、頭もない、勝てる要素なんて一つもない、それでも、勝たなくちゃいけない。

「大丈夫よ真枇。」

不安そうにしている真枇に声をかける。

「なんたつてあたいは、最強なんだから。」



考えてもみなかった、私が本気で自分の事を最強と呼ぶなんて。そんな実力もないのに、誰も認めてくれたことはないのに、それでも私は最強だと言った。

そんなの違うつて分かってたけど、それでも言い続けた。

なら貫こうじゃないか。

手の平に冷氣を集める、季節や気候的にはまだ能力に向いていた事は幸いだった。  
牽制がてらに氷の弾丸を放つが固い外殻に阻まれ弾かれる。

「……………!!!」

歯向かったことへの怒りなのか、怒りの咆哮を挙げながら襲いかかってくる。

私は飛びあがってその攻撃をかわした、木々が生え並ぶ森の中、大きい向こうより小さい私の方が小回りが利く分動きは速い。  
向かってくる化物をいなしながら弾幕をお見舞いするけれど、全て固い外殻に防がれる。

なら

「氷符「アイシクルフォール!!」」

スペルカードを使う。

私のスペルカードの中で一番貫通力のあるスペル。

「

！！！！」

しかしその弾丸は外殻を少し傷つけるだけで終わった。  
ダメージを受け怒り狂った化物はさらに暴れまわり始めた

「くそ！！」

思わず悪態が出る、既にもう、結果は出たと言っても過言ではない  
だろう。

それが私達に不利なものであるというのはとても不本意だけど。

避ける、避ける、少しづつ避けるのが難しくなっていく。

「グッ！？」

肩に掠った、少しづつ傷が増えていく。

暴れる化物は見境なく攻撃を始め

「マビ！！！！」

化物の攻撃は私の後ろにいる真柎にも伸びてしまった。

私は真柎を逃がすために飛び出し、真柎を突き飛ばした体で化物の  
重い一撃を受けることになった。

ドンッ！！

吹き飛ばされた私は太い木の幹にぶつかって止まる。

「カハッ・・・」

肺の中に溜まっていた空気は全て出て行く、今のは致命傷だ、まともな声が出せない。

呼吸もまともに出来ない。

化物へと視線を向けるとターゲットを真柢に絞ったようである。

私はもう戦えないと判断したのだろう。

実際その通りである。

体は傷だらけ、呼吸もまともにできない、意識を保っていた自分を褒めてやりたいくらいだ。

でも、だからといって私が真柢の前に立たない理由にはならない。

どこかで甘えがあつたんだろう。

自分は死んでもいい、真柢が無事ならそれでいい。

なんせ私は妖精、何度でも生き返ることができるのだから。

でも真柢はここにいる、私が死ねば真柢も死ぬ。

死ねわけにはいかなかった。。

「あん・・・た・・・の、あい・・・ては、あたい・・・でしょうが！！  
」

精一杯大声を張り上げた。

化物はこちらに視線を向ける。

目が合った途端、照準は再びこちらに向いた。

「

!!!!」

再び向かってくる化物。

どうしよう、なんの当てもない。

意地もまあここまでだ、次の瞬間にはまた私の体は吹き飛んでいることだろう。

最後の足掻きだ、目を逸らさない、相手の動きに集中し、手に冷気を集める。

強い攻撃じゃなくていい、最も効率的で、最も早く、最も効果のあるものを選ぶ。

視線の先にあるのはさっきのスペルで傷つけた部分の外殻。冷気は固めずそこに置く。明確な形にはせずに極寒を目指す。

イメージ通りの想像、こんな緊急時じゃないのなら自分を褒めてやりたいのだが、残念ながらそんな時間はないようである。

私も前傾姿勢となって化物へ駆けだした。

勝負は一回限り、それ以降はもう体が動かない。

これに失敗すれば、真柢と私は仲良く死ぬのである。

そして私だけが生き返るのである。

まあ、失敗なんてしないけど。

避けることを考えるのを止めた。

接敵の瞬間、私は傷ついた外殻に向かって飛び込んだ。

これがラストスペル

「凍符「マイナスK」!!」

後の事なんて考えていなかった。

手に凝縮し、コンパクトにした冷気を外殻についた傷を通して体の中に打ち込んだ。

瞬間、再び恐ろしい衝撃が私を襲った。

体格が異次元程違うのだ、それは仕方のないことだと分かっているが、それでも次に来る衝撃は受け入れがたいものだ。  
というか最早とばされているいま既に意識が飛びそうである。

「おめでとう、あなたの勝ちです。」

薄れゆく意識の中その声を聞いた。

「良い新聞の記事が出来ました。」

そういったのはホクホク顔の天狗。

「みていたんだったら助けたっていいじゃないのさ！」

もはや天狗だからとかしらない。

目を覚ましたのは妖怪の森、場所は変わっていないが、気付いた時には全てが終わっていた。

最初死んでいる百足を見て絶句した。

百足の後ろにはナイフが深々と刺さっており、これが致命傷だったと考えられる。

それ以外殆ど傷がない辺り私の攻撃はやはり無意味だったようだ。

私の考えでは、用事なんて嘘だったんだろう、天狗はずっと後ろについて私達のことを観察していたんじゃないだろうか。

「だって最強な妖精がいましたから。」

今度はニヤニヤと笑う、つくづく嫌な性格していると思う。

「ついでに言わせてもらおうなら、あの妖怪相手にはスペルカードを叫ぶ必要ありませんでしたけどね。」

「どういうことよ？」

なんか、会話が成立していなかったあの、相手がスペルカードを使っていなかったあの、そもそも弾幕を張っていなかったあの、いろいろと理由は話していたが、結局よく分からなかった。

なんせ私はバカだから。

自分で言うのはいいのに他人に言われたら力チンと来るこの矛盾はなんなんだろう。

別に弾幕ルールで戦わなくてよかったなんてどうゆうことさ？

まあ、そんなこともすぐに忘れてしまっただろうけど・・・

それよりも、とりあえず言うておくべきことがある。

「助けてくれてありがとう。」

真柢によると吹き飛ばされた私を受け止め助けてくれたらしい。

真柢は言わなかったけど多分化物を倒したのもこいつなんだろう。

「あやや、お礼を言われるとは思ってませんでした。」

意外そうな顔の天狗。

「あたいを助けてくれて、あの化物も倒してくれたんだらう？」

その言葉を聞いて苦笑する天狗。

「あなたを助けはしましたが、助けた時言ったでしょう、聞いていませんでしたか？」

「なにをさ？」

少し呆れたように吐息をはいて、その後もう一度私に向き直った。

「あの百足を倒したのはあなたです。」

「・・・嘘だ。」

「嘘だつたら、あの時私は助けいてません。」

・・・本当に私が倒したのだろうか。  
そんな訳ない、なんせ致命傷は

「あたいはナイフなんか持ってないよ。」

致命傷はあのナイフであつたはずである。

「ま、信じるか信じないかはあなたしだいですよ。」

そう言って目を持っていた本に落とした。

筆を走らせているので何かかいているのだろう。

「時期に日も暮れます、もう帰りなさい、恐い妖怪が出てきますよ。」

それだけ告げて化物の死体の方に向かって行った。

「言われなくても」

私はその背中を見送った後、私を心配そうに見つめていた真枇に目を向ける。

「帰りましょう。」

「うん」

体が痛むが意識を失っている間にも少しは回復していたのだろう、動けない程ではない。

こういう所は妖精万歳。

「チルノちゃん・・・」

「なにさ」

なにか気まずい沈黙。

森の出口を抜け霧の湖に辿り着いた。

人里まで送らなければいけないのでここは素通り。

「ごめんね。」

「いいよ。」

許す許す、今回は自業自得な面も多かったし。



少し赤みがかかってきた空の下、二人で歩いて行く。

「チルノちゃん。」

「なにさ？」

まだなにかあるのか、申し訳なさそうに声は続く。

「かつこよかったよ。」

「・・・なにいつてんのさ。」

少し返答が遅れたのは困ったからじゃない、嬉しかったからだ、本当の意味でその言葉を言われたことがなかったから。

「そんなの当たり前じゃない。」

でも、返す言葉は最初から決まっているのである。

「なんたつてあたいは最強なんだから。」

カッコつけてみたくなる時もあるのだ。

## サイキョーのあたい（後書き）

感想、ご指摘等いただけたら作者が泣いて喜びます。

冬にはやっぱり・・・

奇跡の価値に貴賤なし

サツサツサツ

紅葉も少なからず散った。

季節の変わり目というのは何とも不思議な物である。

憂鬱というか何と言うか、まあ、季節の変わり目より私が憂鬱なのは

「いくら掃いてもなくならない・・・」

むかつく、チヨウむかつく。

参道を落ち葉で埋もれさせる訳にはいかない。

今はあちらこちらに見える程度だが、放っておくと絨毯のように降り積もるのだ。

それも風情に見えなくもないが参拝の方が困ってしまう。

それ即ち客が減る。

つまりはお金がエフンエフン。

まあ、醜いかもしれないが、仕方ない、毎日3人分の食費がかかるのだ。

単純に博霊神社の3倍かかっている、わりと切実な問題である。

こちらら趣味で掃除やってるような巫女とは違つのである。

一人だったら適当にできるのになあ、元は女子高生である。  
コンビニだってあったし、親もいた。

まあ、メンドくさかったら1日くらいお風呂に入らない日もあった。けど今はそうはいかない。家族がいるのである。

いや、前もいたけど、立場がちがうというか・・・

「早苗、これつかまえた!!」

後ろから声がかかる、この神社におわします2柱の1柱守矢諏訪子様

「どうしたんですか」

!?

振り返った瞬間、私の目に飛び込んできたのは大きな瓶の中に封じ込められた氷精。

やべえ、動いてないよ。

何をされたのか知らないが瓶の中で身動きもしない。

や、殺っちまったのか?

「何やってんですか!?!」

「こいつ、私の友達のガマいじめたんだ、だからお仕置き!!」

なんてこった!?

いやいや諏訪子様?

確かにあんたガマだよ、偉いよ?

超偉い、だって神様だもん。

でもね、あんた、それを友達のガマいじめられたくらいで使っちゃ駄目でしょうが。

あんた崇り神なんですよ?

「ハア」

思わず溜め息がでる。

もういい、とりあえず瓶詰め少女をなんとかしなければ。

「すぐ元の場所に返して来てください。」

「え〜。」

渋る神様、パツと見駄々つ子にしか見えない。

ここで私は必殺のカードを切ることにした。

「ご飯抜きますよ。」

「わかったよ〜。」

ブスツとしているが諏訪子様がやっても恐くはない。

大きな瓶を抱えて神社から出て行く諏訪子様、さすが、あんなでっかいフラフラプ廻すだけあって足腰がしっかりしている。

サツサツサツ

また元の掃除に戻った。

いつの間にやらまた落ち葉が増えている。

えいくそ、これを掃き終わったらお守りを作らなければ。

「早苗さん、こんにちは。」

「ハイ、こんにちは」

通り過ぎて行く参拝者の方に挨拶。

諏訪子様がいる時に来なくて本当によかった。

いや、お互いに、ね？

「早苗え」

今度はなんだ？

振り返ると、そこには神社に祭られているもう1柱、八坂神奈子様がいた。

「一杯付き合つてよ。」

そう言つて杯を突き出してくる神様。

あんたは真つ昼間から酒かよ！！

両柱ともにもつとしっかりしてほしい。

まあ、神様としての自覚はあるから文句は言わないけど。

「無理です。」

「え」

反応が諏訪子様と同じである。

「私にも仕事があります。」

「護符はもうつくつておいたよ」

・・・マジで？

そんなことをしてくれるとは、なんとも気が利いている。

「なにか」「何も企んでないよ。」「」

ピシヤリと言われてしまった。

「暇だったからさ。」

カラカラと笑う神様。

それならまあ仕事もなくなった訳だけど・・・

「でもやっぱり止めときます。」

「なんでさ？」

「真っ昼間だからです。」

「じゃあ夜にしようか？」

「軽々しく力を使わないでください。」

「むう。」

こちらも拗ねてしまったような神奈子様。

容姿なんかも全て違うのに、何でこんなにとるそぶりが似ているんだろう。

「拗ねても駄目ですよ？」

「拗ねてなんかいない。」

それを拗ねているというのです。

私は苦笑を洩らす。

「今は無理です。」

「なんでさ？」

また同じ問答か。

「参拝の方が来られますから。」

人が祈るその場所に巫女がいないのは職務怠慢でしょう？

「気にしなくてもいいのに。」

心にもそんなこと思っていないでしょう？

私はこの神様が人を愛している事を知っている。

もちろん、もう一人の小さな神様も。

「一応、この神社の巫女ですので。」

その気持ちを知ってるから、私も巫女として頑張れる。

「・・・分かったよ。」

神奈子様はクシャツと笑うと背中を向け立ち去って行った。

「一応、じゃないよ。」

振り返って一度だけ呟いたその声は私には聞こえなかったけど、心  
なしにその足取りは嬉しそうだった。

サツサツサツ

振り返るとまた少しだけ増えている落ち葉。

「こんにちは、早苗さん。」

「はい、こんにちは。」

参拝に来られた方に挨拶を交わす。

おそらくだがあの2柱は人がいない時を選んで声をかけてきている。



いつの間にか真上だった太陽が傾き気が付いたら夕暮れになっていた。

まだ少し残っている紅葉と夕焼けが重なってとても美しい。

「それで、あなたは？」

私は近くの太い木の枝の上に腰掛けている少女に目を向けた。

何かその木だけ、他の木よりも妙に紅葉が多かったから気にはなっていた。

「あ、あたしに言ってるの？」

急に矛先を向けられたからか、慌てている少女。

「ここには他に誰もいませんよ。」

きよろきよろと周りを見渡し確認する少女。

「直に陽もくれますが？」

「いいのよ、私別に何処に住んでるとかないから。」

少し寂しそうな目をする少女。

まあ、人間じゃないことは分かっていたましたが。

「そうですか、ではこの紅葉もあなたが？」

「そうよ、私の名前は秋静葉、能力は「紅葉を司る程度の能力」。」

それはなんとも風情がある。

しかし枯れない花はないのだ、青々しかった緑は紅に変わり、最終的に朽ちる。

「もしかして、迷惑だった？」

状況を察したのか少し申し訳なさそうにする少女。

「いえいえ、そんなことはありません。」

メンドくさかったけど、いつもメンドくさがりながら掃除を行っているけど

「嘘をつかないで、だってあなたずっと掃除していたじゃない。」

「嘘なんかついていませんよ。」

そう、嘘じゃない、メンドくさい気持ちもホント、でも、止めたい  
と思ったことはない。

「おかげで参拝の方と挨拶ができました。」

「・・・貴方の手、豆だらけじゃない。」

「そりゃ人の子ですもの。」

元々竹箒なんて持ったこともない、それが1日何時間も掃いている  
のだ、豆もできるさ。

「慣れてないのか知らないけど、鼻緒が食い込んで血がでてるよ。」

「そうなんですよね、痛くて痛くて。」

永遠亭のお薬には大変お世話になっております。  
確かにメンドくさいが・・・

「でもやっぱりメイワクではないのですよ。」

「なんでよ!!」

目に涙を溜めている。

私はこの人の何かに触れてしまったらしい。

「そんなの愚問ですよ。」

落ちていた一葉を拾い上げる。

真っ紅な一葉。

「こんなに綺麗なんですもの。」

参道の真っ紅な絨毯を一番見てみたいと思ったのは他ならぬ私であるという自負がある。

「季節に腹をたててどうしますか。」

春には桜が参道を飾り

夏には蝉時雨を聞いて

秋には紅葉を楽しみ

冬には雪を掻き分けるのである。

季節は流れいくもので、私たちはそれに身を任せるのである。

「この手間は当然のものなのです、春には桜を、秋には紅葉を、私の手は掃くのです。」

変わり行く景色を待ち受けるために、過去の季節にサヨナラを告げて、新しい季節を迎えるために。

だから季節の変わり目は憂鬱なのだ、別れを告げる季節が愛おしい

がゆえに、新しい季節への微かな不安をのせて。

「その別れを告げたはずの季節に貴方は会わせてくれた。」

だから

「その奇跡に感謝しています。」

「……訳分かんないわよ。」

秋さんは木から飛び降り、私に近寄ってきた。

「紅葉は、何も実らせない、何も助けない、唯散って土の肥やしになるだけよ。」

「そうですね。」

「私はなにも与えられない、ただそこにあるだけ。」

俯き、自嘲するように呟く秋さん。

「それが何か悪いとでも？」

そう、この討議それ事態には意味はない、重要なのは捉え方である。

「貴方は、全てのものが何かを与えなければならないとお思いですか？」

「いや、そうは言わないけど……」

「貴方は、全てのものが何かを与えられなければならないとお思いですか？」

「いや、そうは……」

「生命を嘗めてはいけません、恐らく神である貴方に私がこんなことをいうのは畏れ多いですが、誰にみられなくても勝手に生命は芽

吹きます。」

咲き誇る花は其処に意味など求めません。  
ならば、いいんじゃないでしょうか。

第一、

「貴方は、意味はないと言いましたが、意味ならあります。」

「・・・なにさ？」

「こんなにも綺麗ではないですか。」

単純なそれは理由として絶対なものである。

「私はこれだけ惹かれました、それを貴方はくだらないと笑いますか？」

「そんなことはない！」

「なら、そこに意味はあります。」

「・・・そっか」

この人が何を抱えているのか私は知らない。

おそらくこの人にとっては大切なもので、譲れないものだったはずである。

「なんかすつきりしたよ、あんがと。」

紅葉のざわめきが少し凪いで見えた。

「はい、しっかりと受け取っておきます。」

折角相手が感謝の気持ちを抱いてくれているのだ、貰わないと罰が当たる。

「早苗えゝ、途中で猪狩つて来たよゝ。」

ちようどいいタイミングで声がかかる。  
これで、今日の献立は決まった。

「早苗えゝ夜になったぞゝ」

待たせてしまった神様に催促もされた。

「ハイハイ！」

返事をして秋の神様に向き直る。

「偶然にも今夜は大物の猪がとれ、奇遇にも大酒のみを相手どる者が1人でも多く欲しいのです。」

視線を向けると期待に目がかがやいている様子。  
俯いていたその顔はもう上を向いていた。

「今夜は鍋ですが、一緒にいかがです？」

紅葉がまた散る。

幻想郷にももうすぐ冬が来る。

来年までさよなら。

手向けの花は暖かい4人での食卓。

## 稗田あつきゅん探検隊

「ほんとうに？」

「いいさ」

「本当に私が此処でいいの？」

c u r i o s i t y   l i v e d   t h e   c a t .

宵闇の頃

私は旅にでるのである。

未知を探して、己の不知を埋める為。

亡くすことのないこの思考過程のなか、唯知り得ぬものへと手を伸ばす。

「・・・・・・・・！！」

声が聞こえる。

遠くから近くからキヨリを越えて。

その啼き声は森の中から何処か寂寥を含んで、白薄の狭間まで走り続ける。

ぬえが啼き始めたのはいつ頃からだったか覚えていない

しかし私がこれを始めたのは神無月の九日、子の刻のことである。

その時私はこう考えた。

“ コレはなんなのだろう？ ”

私は私の世界が閉塞して行くのを感じた。

私はすべからく忘れない。

私の人生はつまり私の知っていることしかない世界なのである。

既知のものを知らないものとすることもできず  
また不知のものを知っているということも私は良しとしなかった、  
つまりは閉塞である。

私の世界は知っていることか知らないものの二元論にしか過ぎなく  
なっており、その世界のなかでもどうやら私は特別で、知らないも  
のが極端に少ないようであった。

だからこそ私は知りたい。

この啼き声は何なのか、気のせいかもしれないが、私には如何にも  
助けを求めているような気がしてならなかったのである。

「 行きますよ、<sup>つぎ</sup>鎬 」

「 ハイハイ、阿求ちゃん。 」

真柎以外の供を連れて夜を出歩くのは初めてである。

なんだってあの黒い塊はいつもならすんなり起きるのに、今日とい  
う鎬の夜デビューに起きて来ないのだ。



今日こそは正体を確かめてみせる。  
それは、決意であるとともに一種の確信も含んでいた。

その確信の根拠はと問われると、この女性である。  
最近我が阿求家の女中になったばかりのこの女性、名を鎬というらしい。

鎬は外来人らしく、女性の癖にとっても背の高い女だった。

また、自身をダイガクセイと名乗っており、外の世界の寺子屋の様な物に通っていたらしい。

知識も豊富で、飄々としながらも理知的な女性であることはその瞳からみてとれた。

“ 今度慧音先生の所にも顔を見せに行かねば ” とそう私が考えていたのを覚えている。

それはそうとして、此处で何よりも重要なことは、この女性が理知的であるかではなく。

この女性が外来人であるかでもない。

鎬は森の入口で私と出会った。

そしてその時、こう尋ねたのである。

“ 稗田家ってどちらにあるかご存知ですか？ ”

偶然が過ぎやしないだろうか。

無論、その当初鎬とは面識もなかったし、会話などしたこともない。  
この私が言うのだ、絶対、完全にこの女性との会合など今まで一度もない。

そして、里人の中でこのような女性がない事も分かっていた。

第一、里人の服装ではない。  
間違うはずもなかった。

私はこう言った。

“分かりますが、何用ですか？”

恐らく、私の事を稗田家の者とは分かっているのだろう。  
それでもこの人は、目の前の人物が自分の問いかけに答えられると  
いう事実喜んでいる様であった。

“ぬえという方から紹介されました・・・”

自分でもよく分からないというように首を傾げ口籠もる。  
しかし、その一言が私が一番聞きたいものであった。

そこから私は怒涛の質問を繰り返した。

ぬえに会ったのか？何処で？そこで何をしていたのか？

鎬は一つ一つ答えてくれた。

ぬえは何故私を訪ねると言ったのか。

“私にはぬえ様からの紹介という部分を伝えて欲しいのだと思えま  
した・・・”

鎬はそう言っていた。

一度も正体を見たこともないぬえが如何して？

私は警戒心を覚えた。

これは罠なのかもしれない。

正体を知られることに怒ったぬえが私を消そうとしているのかもしれない。

しかし、この女性が畏だとは如何しても思えなかった。

この目は企むような目ではない。

それより何より、ぬえには鎬と出会える条件下では傷一つ付けられなかっただろう。

鎬には能力があった。

それを無意識にでも使っていたあの状況では、悪意のある妖怪はそもそも出くわす事が出来ない状況だったのである。

という事はぬえは悪意を持っていなかったということになる。

それどころか鎬は命の恩人だと言って恩義を感じていた。

もう訳が分からない、里で恐れられている化物が命の恩人だと？

頭の中に疑問符がたくさんうかんでいた。

「こつちですね。」

鎬はスタスタと進んでいく。

そこに迷いはなく、最初から向かう場所が分かっているかのようだった。

「本当に、便利な能力ですね。」

私はそれについていく。

「そうですね、使い勝手が悪いような気もしますが。」

それに苦笑気味に返す鎬。

気付けば、森も少し奥まった所まで来ていた。

「まだですか？」

少し疲れてきた。

我が家の宿命であるが、この虚弱体質が今は憎たらしい。

「そう少しです。」

まだ鎬は余裕がありそうである。

少し息は乱れているが、まだその声には余裕があった。

「こんな事まで頼んでしまつてごめんなさいね。」

そう、鎬は女中である。

稗田家の家事などを世話する者でこういう事は範疇外だ。

「いいんですよ」

健脚振りを見せながら、鎬は語る。

「働かせてもらっている身ですし、それに・・・」

不意に顔を俯かせ口籠もる鎬。

「それに？」

私は問い返す。

「それに、ぬえさんもそれを望んでいるようでしたし。」

そう言っ て鎬の足は止まった。

「さて、この茂みを越えればそこにぬえさんがいます。」

そうやって指差した先にあるのは一際背の高い茂み・

私は拳を握り込んだ。

「私はここまで。」

分かっている。

そういう約束だったから。

「そこで待っていてね。」

私は鎬を置いて、一人で向かわなくてはならない。

「ぬえは、その人の一番恐怖しているモノに映ります。」

その位の事知っている。

伊達で書物を作っている訳ではない。

「私には、耐えられませんでした・・・」

忠告が途中から自嘲になっている鎬。

「行ってくるわね。」（耐えられない程濃密な過去があっ てうらやましいわ。）

私は茂みを越えた。

そこには、小さな小さな少女がいた。

「……………」

ビリビリビリッッ！！！！

その少女らしからぬ雄たけびは空気を震わせあの特徴的な啼き声を出した。

間違いない、あの少女がぬえである。

啼き声が収まった後も少女はこちらをじっと睨んでいた。

前例の通りならば鎬の言った通り、言葉は通じるのだろうか。

少女は一向に口を開かない。

だから私も迂闊に話しかけられないでいたのだが、すると。

「……………」

先程よりも長く、先程よりも大きくその声は響いた。

ッ！

あまりの煩さに耳を抑える。

最早それは音ではなく衝撃だった。

啼き声が収まると再び沈黙。

「ぬえとは存外可愛いモノですね。」

間違いなく目が合っている。

あれがぬえだ、虎でも鶇でもない、少女だ。

「・・・お前には私が何に視えている？」

そんなもの決まっている。

「変な翼の生えた少女。」

それに驚いた顔をするぬえ。

「・・・お前そんなものが恐いのか？」

「そんな訳ありません。」

どうしよう、会話が成り立っているじゃないか。

少女は少し考えるように頭を抱え次の瞬間にはまたスワッ！とこちらに向き直り三本指をたてた。

「この指は何本に見える？」

「三本です。」

「・・・視えてるじゃないか。」

少女は頭を抱えている。

どうやら、私には、正体不明であるぬえの正体がバッチリ視えている様である。

「お前には私は何に視える？」

まだ耳の中で反響する音にふらつく私のもとにその声は放たれた。どうやらこのふらつきを恐怖によるものと勘違いしたらしい。

「お前には私はどう映る？」

少女の独白は続く。

「お前には私はどんな化物に視えるんだ？」

少しずつ近付いてくる少女。

その様は愉快そうに笑ってはいたけれど、何処か寂しそうで、何処か諦観を含んでいるようだった。何なのだその表情は。

「お前には」「私には！」「」

気付けば声に出していた。

それは私にしては珍しく根拠のないモノだった。しかし、それは何故か確信を持って言える事だった。



「私には、あなたが見えます。」

左右に異なる翼を生やし、全身黒尽くめのその格好で、闇夜に佇む少女が私には見えた。

「この闇夜の中、風に吹かれて寂しそうに佇むあなたが見えます。」

少女は驚くと何か考え込むようにして指を三本たてた。

「この指は何本だ？」

「三本です。」

「・・・見えてるじゃないか。」

頭を抱えるぬえ。

「だから見えていると言ったじゃありませんか。」

「お前まで私を脅かすのか・・・」

呟くその声が何を意味するのか分からなかった。

「何故だ？私の正体を見た女が私をみれたのは私が能力を使う事を止めたからだ、お前には何で私の姿が見える？」

恐らく鎬の事を言っているのだろう。

そしてこれも当然の事であるのだがそれを答えるなら。

「私が一番恐ろしいものだからです。」

「私自身が？」

自分自身の体を改めて見ているぬえ。

ぬえはその人の一番恐ろしいモノが映るという。  
ならば、私がぬえを見たのはつまりそういうことなのだ。

「そうです、私はあなたが一番恐ろしい。」

この少女こそが、ぬえこそが私の一番である。

「何故だ？」

「あなたが未知だからです。」

どんなに力があるうと

どんなに知識があるうと

どんなに狡賢かろうと

恐ろしいが一番ではない

知らない事。

単純なそれが一番恐ろしい。

だからこそ、私は見知らぬ人との出会いそれぞれが恐ろしく、その最たるものであるぬえそれ自身を私が恐怖しているのは私自身納得で、逆に自分の根幹を間違えていなかったことが何より私を安堵させた。

「私は今、とても怖い。」

しかし、それは日常の中に何時だって孕んでいるものなのだ。

自分のおこした行動がどう反響を呼ぶのか恐怖し

周りの人が次の瞬間何をするのかに恐怖する

それは時に称賛であったり、逆に非難であるかもしれない。

何がおきるか分らない。

目が覚めた時に周りに道などない。

ただこれと決め、目印をつけて進んでいく日常が・・・

日々訳も分からず、進んでいた足跡が・・・

振り返れば道となっているのである。

「あなたが、今初めて会ってしまったあなたが。」

日々それぞれに表情をつけ、歩いて行くのは私である。

それぞれの日々に興味などなく、そこに意味を求めるのが人間である。  
わたし

「私は今、とても怖い。」

何せ人は暢気である。

自分のおこした行動がどう反響を呼ぶのか期待し

周りの人が次の瞬間に何をするのかに期待する

それは時に非難であったり、逆に称賛であるかもしれない。

この楽観的思考こそが、私を私たらしめている由縁であり、それと同時に証明でもある。

人は日常を踏破していくのだ。

ぬえは私の話を黙って聞いている。

「私はうまく話せていますか？」

私の言葉は私が伝えたい通りの意味であなたに届いているのだろう

か。

「私はあなたの意志を正しく理解していますか？」

あなたとのこの会話の中で、判断してきたこの選択は間違っていないか？

「私はただ、それが怖い。」

私の恐怖はそれだけである。

こんなことが私は一番恐ろしい。

日々の繋がりの中で、表情をつける私は、その一日を何も無い一日だったと言いたいだけなのである。

私は何も忘れない、忘れられない。

全ての記憶が私の頭にこびりつき、どうやっても離れない。

一人の人が言った悪口は私の中で永遠に反響されるのである。

「馬鹿が、それが人間なのだろう？」

ぬえが言った。

つまらない日常を這いずって、愚直に真っ直ぐに生きているのが人間だと

「確かに、日々は分からなくて、現実には甘くない。それでも」

ぬえは私を見据えて言った。

「傷つきながら進んでいけ、人間」

この時にはもう確信していた。

「あなたは、優しい妖怪ですね。」

今日この日に感謝したい。

私は今日、とても貴重な体験をしている。

「そんなことはない。」

プイツとそっぽ向くぬえ。

怖い噂はあろうが、里で喰われた者はいない。  
逆に死傷者が減った位である。

鎬の気持ちは今ならば分かる気がした。

「ありがとうございます。」

私はペコリと頭を下げる。

「お前のそれも大分不粹なんだがな・・・」

頭を掻くぬえ。

「それでも、お前のそれは確かに恐ろしい。」

ぬえはポツリと呟く。

「私を追いかける理由がなんとなく分かったよ。」

「そうですか」

ならばもう私が伝える事はない。

「しかし、駄目だ。」

そういつて私の要求は断られた。

「なぜですか？」

分かつてはいたけど、その理由を求める。

「私が正体不明だからだ。」

そう言つて私の前からぬえは姿を消した。

「また遊びに来ますよ。」

向かいの林に眩くようにその言葉を零した。

帰らなくては、鎬が向かいの森で待っている。

「お待たせしました。」

茂みを越えたその先では、鎬が木を背にして胡座をかいて眠っていた。

「おきなさい。」

頬を軽く叩こうとすると

「どうでしたか？」

鎬はこちらを向いて目を開けた。  
寝てなかったな、こいつ。

少し心配そうな声を背に、私は来た道を帰りはじめた。

「待ってくださいよ。」

それを追いかけてくる鎬。

「どうだったんですか？」

何がかの主語が抜けている事を小一時間問い詰めたい所だったが、  
何を聞きたいのかは分かっている。

「会えましたよ。」

「・・・それで？」

息を吞んでいる鎬。

何だ？私は何を見たと思っているんだ？

「かわいい女の子でしたが、振られてしまいました。」

しかし、諦めない。

人だから。

傷ついても進むのだ。

なんせ人だから。

それはあなたが教えてくれたのだから自業自得でしょう？

今までいた場所を振り返る。  
何処からか不機嫌そうに揺れる茂みの音が聞こえた。



## 東方忘却録 再

その無聊を穿つ

何とも今日は不思議な客が来た。  
永遠亭の御姫様である。

外は雨が降っており、月が少しだけ顔を見せていた。

授業の準備は既に終わっているため、何の気兼ねもない。  
お茶請けの煎餅を出して煎茶を淹れる。

ポケットに入れたままでは溶けてしまうので、包みに入ったドロップを机に置いた。

このドロップは 「あなたに少し小言を言いに来たの。」

思考が逸らされる。

蓬萊の姫が私にお小言？

「なんででしょうか？」

ほぼ蠟燭だけの明かりの室内は何やらおどろおどろしい。

「あなたに会いたがつてる人があるわ。」  
「・・・それは誰の事でしょう？」

私にはあまり心当りが無い。

「憎い筈の私に頭まで下げてきたわ。」

思い当たるのが一人いる。

「残念ながら今日は来ていませんね。」

しかし、今日姫の喧嘩相手は不在である。

「だから私が来たのよ。」

意味がよく分からない。

何故本人が来ないのだろう・・・

「あいつはなぜ来ないのですか？」

私はそのまま口に出していた。

「それは教えられないわ。」

姫は楽しそうに笑う。

本当に掴めない人である。

「どついう事なのです？」

「私にもよく分からない。」

なんだそれは？

その返答は私にとって不満に過ぎる。

クスクスと笑う姫様。

何が楽しいのか分からない。

「何が楽しいのですか？」

その様が無故に苛立つ私。

「いいじゃない別に、楽しいから笑うのよ」

そのコロコロとした笑顔は純粹で綺麗ではあったが、嫌悪感しか抱かなかった。

「では私が楽しくないので笑わないでください。」

「どうしたの先生、やけに横暴じゃないか？」

それでも楽しそうに笑うこの女。

確かに私らしくない、なにせ今の私はこの女を殺すイメージまで明確にイメージしていたのだから。

「それじゃあね。」

そう言っただけでまたわらうと蓬来の姫は帰って行った。

帰る時にちゃっかりお茶請けの煎餅を食べきっていたことにまた腹がたった。

「

ああ、  
また間違えた」

## 東方忘却録 再（後書き）

読了ありがとうございます。

感想、ご指摘あればよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4447y/>

---

幻想郷フハフハン録

2011年11月30日21時48分発行